

ら引込められてしまふと、小ふみといふ女はまつたくこの世の中  
にゐなくなつて、それからだんだん一日一日と世の中から忘れら  
れていつて了ふんだと思つてね。——さう思ふと何んだか妙な  
心持がして仕様がなかつた。」と、Tさんが云つた。

私はそれを聞いたら、何んだが莫迦にしみじみした氣になつた。

「Tさんそれは面白いお話ですね」と云つた。

「それは一寸いい話だよ。」と、B君も云つた。

「さうですか、そりや有りがたうござ座います。」と、Tさんは笑ひな  
げら盃をとり上げた。

それから暫らくして、やうやうふみ子が來た。薄い桔梗色の着  
物の裾をひいて、しとやかに這入つて來た。なるほど見たところ、

品のいい、しづかな藝者だ。私たちがかんがへてゐたよりもまだ  
品がよくしづかにおつとりとしてゐた。もう二十三とか四とか  
聞いてゐたが、見たところでは、まだとてもそんなには見えない。  
さう云つて別に、若く見せようと思つて作つてゐるんぢやあない。  
そんな浮いたやうなところは、ちつともないんだ。

「いかがでござ座います。」と云つて、お銚子をひかへて、黙つて三人  
の前に坐つてゐた。——餘計な口なんか、なかなかきさうにも  
しない。

「春逢つたつきりですね。」と、Tさんが云つた。

「さうでござ座いましたねえ、私、どつかでお目にかかつたやうだと  
思つて居りましたんですけれど——やつぱりこちらのお家でござ



座いましたねえ。」と、ふみ子が云つた。

「丁度大勢と一緒にしてね。——あのとき私は貴方に面白いものを見せて貰ひましたかねえ。」

「あら、さうでございましたか。」

「K先生とM先生とお書きになつたものをね。」

「さうでございましたかねえ。」と静かにこたへた。

「落ちついたもんですねえ。」とB君が小さな聲で私にさう云つた。

私は笑つてうなづいたが——しかしどうも先刻から見ているのにどうもその顔が見覚えのあるやうな顔なんでね。何處かで見つた事のある——何處かで逢つたことのある顔なんだ。

私は思ひ出さうとしてかんがへた。黙つて横からその顔を見てゐると、その眼のあたりから、願のあたり——顔の輪廓にどうも覚えがある——知つてゐる——

そこへまた一人藝者が這入つて來た。歌澤が寅派の名取とか云ふんで、ふみ子よりは年は若いんだらうが、しかし並んで坐るとふみ子よりたいへんに色が淡い。——しかしその藝者が這入つてきて、ふみ子がそれに撻撻しようと思つて、一寸横をむいたとき、私はふとその顔を思ひ出した。見覚えのあるはずだ。それは歌舞伎座に出てゐる市之丞——もと淺草の芝居で猿之丞といつたあの女形の顔に何處かよく似てゐるんだ。

しかしさう解つたら、「なんだ詰らない。」と思つて、私はがつか



りした。

女が二人になつて、すつかりで五人になつたんで、すこしは賑やかになつた。それにTさんがだんだん廻つてきたんで、四邊の心持がだんだん浮いて来た。——しかし日がもうよつぽど短くなつてゐるんで、四時過ぎるといふと、もうそろそろ暮れかけてくるやうになる。ことに今日は曇つてたんで、ちきに川の方から、薄ら寒い風が吹きだして、灰いろの色、の褪めたやうな靄がどんよりと水の上を下りた。向う河岸はもうよく見えない。すると障子の下を通る舟の音と水の音とが、身に染みるやうにはつきりと聞こえる。

そのうち電燈がついた。

生憎B君は今夜送別會がまだ一つ残つてゐて、是非ともそれに行かなければならない。六時といふ約束が、時計を見ると、もう五時すぎでゐる。

「ここから三十分あつたら、築地まで行かれますかねえ。」とB君が私にさうつと云つた。

「ええ三十分あれば、浅草橋から大丈夫行かれます。」

「ぢやあね、とにかく半になつたら、六時といふ約束ですからと一足さきに失禮しますから、済みませんけれどね、貴方はすこし後に残つてTにつき合つてゐてやつて下さいませんか。」

「しかし一緒に出ようぢやありませんか。」と私は云つた。

「でも折角Tがいい心持になりかけたのを、今出ちやあ氣の毒で



すから——そのうちいい時分を見て、一緒に連れだして呉れませんか。

「さうですか——ちやあ、さういふ事にしませうか。」

「どうぞ——Tにはまたいいやうに云つて出かけますから——」  
「ええようござんす、——ちやあいづれまた明後日新橋でお目にかかりますから。」と云つて私は後へ残る事になつた。

それでちきにB君は、Tさんと私を残してさきに歸つてしまつた。私がB君を廊下まで送つて座敷へ歸つてくると、Tさんは後からきた藝者を相手に、いいきげんになつて三味線を弾いてゐた。  
「此方におめにかかる、いつもお稽古をして頂くんですよ。」と私がそばに坐ると、その藝者が云つた。ふみ子はやつぱり黙つ

て、——しかし何處か解けたところがあるやうに、やさしく笑ひながら、それを見てゐた。

そのうちに、外は——川の上はいよいよだんだんと昏くなつて行つて仕舞、蒸気が燈火をつけて忙しうに通る。その燈火が心細く水のなかへうつる。——見るまに夜になつてしまつた。しかし空はやつぱり曇つてゐるんで、星も見えなければ、月も見えない。

「もうすつかり日が暮れたんですね。」と誰に云ふともなく私が云つた。すると、

「さうで御座いますねえ。」とふみ子が云つた。

燈火のかけで私はふと、またよく、もう一度その顔を見た。——



なるほど市之丞に似てゐる似てゐることはたしかに似てゐる。しかし私が見覚えがあるとさう思ふのはどうも市之丞に似てゐてさう思ふんぢやあないやうな気がする、——なんかまだ外になんかまだ外の譯でもつて見覚えがあるやうに思ふんぢやあないかといふやうな気がふとした——

「この唄を死んだ小ふみが好きでしてね。」と云ひながら、「とめてもかへる、なだめても……」とかいふ紅葉の作つた端唄をTさんが藝者と二人で弾いてゐた。

私はふと思ひついたんで、

「妙なことを聞くやうですけれどね。」と云つて、ふみ子の顔を見た。

「え。」

「もしかね、貴方はもと公園のそばにゐたことはありやあしませんでしたか。」と訊いて見た。

「公園のそばですか——ええ、小さな時分廣小路の近所の、仲町の學校へ行つてた事がありましたけれど——。」

「ちやあね、貴方の家は廣小路の通りから一寸横へ這入つたところにあるやあしませんでしたか。」

「ええ、さうです。」

「ちやあね、貴方のお父さんは、なんか芝居の方に關係なすつてゐやしませんでしたか。」

「ええ——」



「それでお見世ぢやあ貸本かなんかして。」

「ええさうです。してゐました。」

「それぢやあ、貴方には妹さんが一人あつたでせう。」と私はふとつきつめたやうな氣になつた。

「ええ、ありました——どうしてです。」と、やつぱりふみ子は靜かにこたへた。

世間は思ひのほか狭くつて、——このふみ子といふ人は、私がかがしてゐるひとの姉さんだつた、——あの先刻云つた襟のかかつた着物を着て、髪を桃割に結つて、ときどき貸本屋の家へ遊びに來た、あのお酌の姉さんがこのふみ子だつたんだ。

「なんだか不思議なんですがね。私は子供の時分あなたを知つ

てたんですよ。——どうもさつきから見えてゐて、見覚えがあると思つてかんがへてたんですけれど——」

「まあさうでございますか。私は九つの時から柳橋へ來てしまつたんですけれど、時々宿下りに家へ行きましたから。」とかう云つた。

私は今までさがしてさがして、さがしあぐんで、それでふと一軒の家の門の前に立つた。さうしたらその家が、偶然その自分の探してゐた家だつた。私はもうひと足門の中へ這入れれば、いばかりになつたんだ。門の中へひと足這入れれば、すぐこの戀と運命の謎がすつかり解けるんだと思つたら、心持がなんだか急に、薄明るくなつたやうになつたんで。——しかし妹さんは今どうなさい



ました。」と私はわざとそれとなく訊いた。  
するとふみ子は

「小ふみさんですか。」と云つた。

——去年の秋一本になつて、——今年の春死んで——K先生が  
其お葬ひに行つた——春雨に紅い椿が濡れた——さうしてTさ  
んがよく唄を教へた——橋のそばの寫真屋に暫く寫真が出てゐ  
た——その小ふみが——私はその小ふみをながい間さがしてゐ  
たんだ——それで死んだのを知らないで、さがしてゐたんだ——」

ここまで話して來たとき、

「涙が出なかつたかい。」と、私はSに冷かすやうに云ひました。

「涙が出るにも、なんにも何んだか私はぼんやりしてしまつた。」  
と、Sは云ひました。

「そのTさんつて云ふ人は、知つて、知らなかつたんだね。」

「さうなんだ。知つて、知らなかつたんだ。私も小ふみといふ名  
前なら、前から知つてゐて、現に口へ出して云つたことがあるんだ  
——しかし、それがさうだと、眞實に夢にも思はなかつた。」

「それが世の中なんだよ。」と、私が笑ひました。

「それから何うしたい。」

「それからつて、それからは別に話はない。川の上はもうすつかり  
眞つ暗になつてしまつた。それからちきに私はTさんと一緒に  
にそこの家を出て、死んだ人の話をまたいろいろ聞きながら、寒い



風の吹く中をTさんを送りがてら兩國まであるいた。——かれこれもう八時近かつた。しかし来たときにはまだ何處の座敷にもお客がゐなくつて、四邊が閑寂としてゐたけれど、歸るときはもう、隣の座敷でも三味線の音がして、廊下には人が大勢ゐて、何だかやがやしてゐた。なんだか違つた世界からでも送り出されるやうな氣がして、燈火のあかるい玄關を出入るのが、なんだか私は寂しかつた。』と、Sが云ひました。

『謎がとけすぎたんでがつかりしたんだらう。』

Sは、ふと暫く黙つてゐましたが、やがて、

『君はどう思ふ。』と、云ひました。

『どう思ふつて、何を。』

『この話をさ。』

『さうだねえ、何んだかかう、因縁話みたやうな話だねえ。』

『因縁話——』と、Sは私の顔を一寸見ました。

『——さうかねえ、因縁話かねえ。』と、何んかまだよく解らないやうな様子でした。(一年十月)



『はつ夏』



お咲さんが今度いよいよ養子をとるといふ噂がきこえたときには、世間では色んな評判を立てた。

『その養子つて云ふのは、知つてて来るんだらうか、知らないで来るんだらうか。』

『無論知らないんだらう。』

『いいえ知つてるんだらう。来るとなれば、先方だつて相當に調べやうちやあないか。』



『だけどあの役者とはすつかりもう手が切れたのかしら。』  
 『まだすつかりとは行つてないんぢやあないか。』  
 『だけど若し知らないで来るんだとしたら、来る男は氣の毒なも  
 んだね。』

『ひと通りのものぢやあ、来たつて、とても辛抱が出来やしない。』  
 『併し来るからには、何もかもすつかり知つてゐて、その上に何か  
 考へがあつて来るんぢやあないか。』

『大きにさうかも知れない。今まで散々他を泣かして来た報い  
 で、今度はあべこべに泣かされる時が来たんだらう。』

『とにかくいまに、ひと騒動初まるに違ひない。』

かういふ色んな世間の評判の中へ来たのが今の藤さんだつた。  
 併し藤さんは、お咲さんにどんな事があるか、——歌舞伎座の  
 役者の事も何にも、そんな事は一切知らなかつた。何にも知らな  
 いて養子になつたのだつた。

實を云ふと、藤さんの方も、すこし事情があつて、急に身のふりか  
 たをつけたい處だつたので、お咲さんの話を持ち込まれると、すぐ  
 承知してしまつて、碌に様子なんか聞かなかつた。一つはまたそ  
 の話を持ち込んで来た人といふのが、平生色んな厄介をかけてゐ  
 る人なので、立ち入つた事をきくなんてそんな贅澤がましい無理  
 がきかなかつたのだつた。

だから藤さんは見合ひをして見て驚いた。横山町の小間物屋



のあととり娘にしては、すこし扮装やなんか得意過ぎると思つた。——しかし横山町で評判の娘だといふなかうど口は嘘ぢやあなかつたと思つた。

丁度そのとき、お咲さんは二十二で、藤さんは二十六だつた。

生憎世間の評判はどれもみんな當らなかつた。お咲さんと藤さんの二人の仲は至つて無事で、なかなか待つてても騒動なんか起るやうな模様は見えなかつた。

すると世間では、またこんな評判を立て初めた。

『大分仲がよささうだつてね。』

『まだ解るもんかね。——見てゐりやあ、きつと今に何か初まるか

ら。』

『やつぱり何んにも知らなかつたらしいね。——しかし、なまじ解らなかつただけに、解つたらいいよ事だらう。』

『だけど全然解らないつて事はありやあしない。解つてゐるには違ひないんだ。解つててもしかし、そこに何んか餘り強い事の云へない義理かなんかが男の方にあるんぢやあないか。』

『惚れた弱身かも知れないね。』

『男の方はそれにしても、お咲さんの方でよく我慢してゐるね。』

——そりやあ表向きは、綺麗に切れたかどうか知らないけれど、お咲さんだつて、相變らず先方の羽振のいいのを見たら未練も出でだらうがね。また先方の役者の方にしたつて、子供まで出来た仲



だと思つたら、浮いた氣ばかりぢやあなくつて、ちつとは残り惜しいといふやうな未練があるだらうからね。』

『あのお咲さんが急にさう音なしくなつてしまふつて筈はないからね。』

『兎に角そのうちに何んか初まるに違ひない。』

『初まらないで済むものか。きつと何んかひと騒動初まるから。』

しかし藤さんは、ぢきにお咲さんについて、色んな事を聞きこんだけれど、そこには何事も起るやうな氣色は見えなかつた。

お咲さんが歌舞伎座の或る役者にふと馴れそめて、兩方ですつかり上りつめて一時たいへんな評判になつた事も聞いた。それ

でその二人の間には子供まで出来たけれど、何しろ相手の役者の方には、れつきとした立派な細君があるのでどうする事も出来ず、紛紜した末、子供は向うへ遣りとうとうその儘別れる事になつてしまつたと云ふ詳しい話を聞いた。しかし、さう詳しい話をきいても、藤さんは別に氣にもならなかつた。心配にもならなかつた。

— それですべて黙つて済ましてゐた。

お咲さんも藤さんが黙つて済ましてゐるのを見て、やつぱりそれに連れて黙つて済ましてゐた。しかし黙つて済ましてはゐても、お咲さんは、藤さんと一緒になつてからは、とにかく見ちがへるやうに地道になつてしまつた。浮いたやうな様子をすつかり捨ててしまつた。— 義理でもなければ、以前のやうに芝居へも行



かないし、義理があつても、唄や三味線の會なんかへは、なりたけ顔を出さないやうになつた。――

藤さんはお咲さんがさうやつて、さういふ風に、急に心持をかへたのを、以前の事に考へて、なんだかいぢらしいやうに思はれた。お咲さんはまた藤さんが何もかも以前の事を知つてしまつたくせに、何とも云はないで黙つて、見て見ないふりをしてゐるのが、何とも云へず氣の毒なやうな氣がして仕様がなかつた。

藤さんもお咲さんも、二人とも「あきらめる」といふことをよく考へてゐた。――

何時までたつても、騒動は起らなかつた。そのうち世間では待

ちくたびれてしまつたと見えて、もうあんまり評判をしなくなつてしまつた。

一年たち、二年たちした。――世間の評判はだんだんなくなつて、お咲さんはだんだん素直な、やさしい、さびしいお内儀さんになつてしまつた。

三年目の花の咲く時分にお咲さんは女の子を生んだ。しかし生れるとすぐその子は死んでしまつた。さうしてお咲さんは、そのまゝ暑いうち中一杯すつかり煩つてしまつた。

しかし秋口になると、追々快くなつて來たので、藤さんはお咲さ



んを連れて静養かたがた鹽原の方へ一月ばかり遊びに行つた。  
 | 丁度いい工合に見世の方の都合がついたので、藤さんも、お咲  
 さんと一緒に二人で向うへ行つたつきりになつてしまつた。  
 一月あるうちに、すつかり秋が深くなつてしまつた。風が終日  
 つれないやうに吹く。| 夕方になると霧が降つてくる。| 藤さ  
 んもお咲さんも、毎日二人つきりて何にも所在がないもんだから、  
 だんだん心持が淋しくなつて仕様がなくなつた。ことに日が暮  
 れて、燈火がつくと、山に温泉の香が立つ。| もう何かしなくつて  
 は、ゐられないやうな氣になつて來るので、お咲さんは二三年とい  
 ふもの全く手にとらなかつた三味線を、ふと久しぶりで、弾いて見  
 る氣にもなつた。

お咲さんが三味線をひくと、藤さんが思ひがけなく端唄をひか  
 して、自分もうたつた。| お咲さんはそれが聞き覚えやなんかで  
 覺えた藝でない、ふと思つた。

しかしお咲さんはさうやつて、久しぶりで三味線をひいて見る  
 と、とり返しのつかないといふやうな、悲しい、はかない事ばかりが  
 色々思ひ出された。| さうでなくつてもお咲さんは、煩つてから  
 急にすこし涙もろくなつたやうになつてゐた。

東京へ歸つて來ると、お咲さんはすつかり歇私的里になつてし  
 まつた。

餘り家にはかり置いて、氣をつかはせてはいけなと思つて、家



ではお咲さんを以前のやうに、またすこし氣儘に遊ばせやうとした。しかしお咲さんは云ふ事をきかなかつた。幾らすすめて見ても、どうしても、もう以前のやうに浮き浮き外へ出るやうな事はしなかつた。——ことに人中なんかを嫌つて、芝居へもふつつり行かなくなつてしまつた。

藤さんはいろいろに心配した。——しかし幾ら心配しても、心配しただけでは駄目だと思つて、自分が先へ立つて、方々へ引つ張り出す事にした。

芝居は勿論、音楽會や何んかそんな種類のものへは、たいがい缺かさず出かけた。

菊も見に行けば、萩も見に行つた。——大師様へお詣りにも行け

ば三越や白木へも遊びにも行つた。——さうして、お咲さんは藤さんと二人なら、また以前に返つたかと思はれるやうに、浮き浮きして何處へでも一緒に出あるいた。

時にはまた、夕方二人でご飯を喰べに行つて、藝者をあげて、賑やかに遊んで来るやうな事もあつた。——

藤さんは、まだお咲さんの家へ來ない前、言ひかはした女が一人あつた。それは淺草の藝者だつたが互に深く思ひ合つて、かなり長い間倦きずに會つてゐた。

すると、そのうち、その藝者にいいお客がついた。藤さんはそれが解ると、ふと果敢ない氣がして、嫌な思ひをしないうち早く別れ



夏つば

てしまはうといふやうな氣が出た。それで直ぐ、そのまんま別れてしまつた。

丁度その藝者に別れて、藤さんは世の中がなんだか果敢ないやうな氣になつてゐるところへ、お咲さんの話が持ち込まれた。藤さんはとにかく自分を何とかしたい時だつたから、すぐに話は纏まつた。

それで藤さんがお咲さんの家へ來るとちぎ、その藝者はそのお客に落籍された。——その落籍されたといふ話を聞いた時には、藤さんは「やつぱり別れてよかつた」と思つた。

しかし藤さんはお咲さんと一緒になつても、その藝者の事を忘れる事が出来なかつた。さうして、何を考へても、半分は始終その

藝者の事を考へてゐた。——さうして、お咲さんの事は何にも考へられなかつた。

二月たつても、三月たつても——半年たつても、藤さんはその藝者の事が忘れられなかつた。

すると丁度一年目に、その藝者が、落籍されたお客と別れて、また元の土地から出る事になつたといふ噂が新聞に出た——

「やつぱり初めつかからかういふなりゆきになるんだつたらう。」といふやうな事を藤さんは、ふと考へた。——それで、経はちぎにまた元へもどつてしまつた。

二年の間、この事は世間へ知れずに済んでゐた。——全く誰も知



らなかつた。

お咲さんも秋鹽原へ行つて、歸つて来るまでは、何にも知らなかつた。歸つて来て、歌私的里になつて、藤さんと一緒に方々遊んであるくやうになつてゐるうちに、「何かあるらしい」といふ事を感づいた。——しかし詳しい事はその翌年の春になつて、やうやく解つた。——名前が小みつと云つて、年が二十一で、一月に一度か二度位づつ入金で會つてゐるといふ事まですつかり解つてしまつた。お咲さんは一度その藝者に會つて見たいと思つた。

しかし藤さんは、そんな事はちつとも氣をつけずにゐたから、夢にも知らなかつた。或る日もいつもの通り、見世の都合を見て、電話でうち合はして、夕方から向島へ出かけた。

すぐさうと氣がつくと、歌私的里のお咲さんは、矢も楯もたまらなくなつて、すぐ藤さんの後を追つかけて向島へ車を急がせた。

吾妻橋から枕橋を渡る時分には、葉櫻のかげに見える水のながれが昏くなつてゐた。さうして方々に燈火がちらちらついているた。

言問のところを曲ると、濃い淺黄色の空が暮れて、夜風がしつとり身にしみた。

お咲さんはふと、四五年前にも、こんな春の晩方、やつぱりこの道を入金へ行つた事を思ひ出した。その時には、戀しい男が歌舞伎座の歸りにそこへ行つて、自分の行くのを待つてて呉れた——し



かし、今夜は連れ添ふ夫が他の女と二人でそこに行つてるのだと思つた——

お咲さんはふとさびしい心持がした。

藤さんはお咲さんが来たと聞いて、餘りその思ひがけないのに驚いた。——途方に暮れて、どうしたらいいか解らないうちに案内を知つたお咲さんは、どンドン座敷の中へ這入つて来た。しかし小みつはもう其時廊下から庭へぬけてかくれてしまつた。

お咲さんはそこへ這入つて来て、いきなり藤さんの側へ坐つた。さうしてそれから何にも云はないで、浮き浮きした調子で土地の藝者を五六人よび、藤さんと二人で陽氣に騒がして遊んだ。

十時頃、二人は二臺の車をつらねて、暗い土手を日本橋へ歸つた。暗い土手には花がまだ白々と咲き残つたところもあつた。

その後、藤さんはお咲さんに色々小みつの事を聞かれるので、苦しくなつて、すつかり喋舌つてしまつた。まだお咲さんの家へ来ない前の事から、一旦別れたけれど、また會ふやうになつた事を、詳しく話してしまつた。

それを聞くとお咲さんは改めて小みつに會ひたくなつた。

しかし藤さんはこの間の晩きり、小みつに逢はないやうな様子だつた。——それを考へると、お咲さんはたいへん氣の毒なやうな氣になつて、いよいよ會ひたくなつた。——さうして自分が一度仲



へ這入つて、二人をもう一度結びつけて見たいやうな氣になつた。

二三日たつてお咲さんは藤さんの留守に見世の帳場に坐つてゐた。すると色の白い髪かみの濃い綺麗きれいな女おんなが一人買物かひものに來た。ごく野暮やまつたくつくつてゐるけれど、何處どこかかくされぬ垢か抜けのした意氣いきなところが見えた。お咲さんがふとその顔かほを見ると、その女おんなは見られまいとするやうに顔かほをそむけてしまつた。さうして急いで歸つて行つてしまつた。

お咲さんは何なんとはなしに、それが小みつだつたやうな氣がした。

それからまた二三日たつと何處どこからかお咲さんのところへ電話でんわがかかつて來た。見世みよの者ものがつかないで來たので、誰だれかと思つて、電話口へ出て見ると、もう電話でんわは切れてゐた。

するとその晩ばんに、お咲さんの所ところへ名前なまえの書かいてない手紙てがみが來た。開ひけて見るとそれは、小みつがよこした手紙てがみだつた。——それには、藤とうさんと自分じぶんとの今いままでの關係かんけいがずつと書かいてあつて、今いままでの事は自分じぶんが悪いんだから許ゆるして呉くれといふやうな事が事細ことこまかに書かいてあつた。——

二三日前にさんちまへ買物かひものに來た女おんなは、やつぱりお咲さんの思おもひ通り小みつだつた。——その後ごお宅たくのご様子ようすはどんなかと思つて、厚あつかましいやうだけれど、他所よそながらお見世みよまで上あつて見たと云いふやうな事こと



が手紙の仕舞ひへ書いてあつた。

小みつはとにかく、たいへんに此間の入金いりきんの事を心配しんぱいしてゐるのだつた。

お咲さんは何だか絆はだされるやうな氣になつた。すぐに長い返事へんじを書いて、小みつのところへやつた。

これが絲口いとぐちになつて、お咲さんと小みつとは藤さんの知らないうちにつづけて二、三度手紙のやりとりをした。二人はまだ會はないさきに、お互の氣心きこころを知り合つて、小みつは三本目の手紙宛あて名なにお咲さんの事を姉上様あねさまと書いてよこした。

姉上様——お咲さんは二、三度その手紙を讀み返した。

お咲さんはとうとうその手紙を藤さんに見せた。藤さんは、不意いきなりなので驚おどろいたが、仕方がないので笑つてゐた。——其晩、お咲さんは、無理むりに藤さんを田圃たんぼの大金だいきんへ連れ出して、そこから小みつを呼んだ。さうしてお咲さんは初めて小みつに會つた。

二人は藤さんをそばへ置いて、三人で靜かに話をした。小みつは、お咲さんの云ふ事ことになんでも合槌あつちをうつた。さうして藤さんとはあまり口くちをきかなかつた。やがて、遅おそくなつて歸りかけると、急に、そのときお咲さんは、もう堪たへられないやうに泣き出した。小みつと藤さんは驚おどろいて介抱かいぼうした。——五月の上旬じゅうじゆんになつたばかりの晩で、いやに生暖なまたかかい雨が暗くらい植込うゑこみの中へ、しとしとと音を立てて降つてゐた。



お咲さんはその後二三度つづけて小みつに逢つた。——藤さんはそのたんびに無理に一緒に引張り出された。——

小みつは一週間に一度位づつお咲さんの處へ手紙を書いた。お咲さんも手紙が來るときつとその返事を書いた。さうしてその手紙を書く度に毎にお咲さんは一度家へ遊びに來るやうにと、きつと書いた。——それで小みつはお咲さんの家へちきに出這入りするやうになつた。

その初めて行つたとき、お咲さんは小みつに珊瑚の簪を呉れた。さうしてそれからお咲さんも晝間小みつの家を尋ねて行くやうになつた。

丁度その時分、お咲さんは藤さんを伴れないで小みつと二人ぎり掘切の菖蒲へ遊びに行つた事なんかがあつた。——それは鐵漿蜻蛉が水に果敢ない夢を畫く時分だつた。

たんだん空が青く晴れて、だんだん暑くなつて來ると、藤さんは去年の今年だから心配して、なりたけお咲さんの氣に逆らはないやうにやうにと氣をつけた。さうして何んでもお咲さんの氣儘にさせて置いた。——しかしお咲さんの歌私的里は、だんだん酷くなるやうだつた。小みつが三日顔を見せない、一人で黙つて泣き暮らしてゐた。

やがて暑い峠を越して、朝晩がだんだん涼しくなつても、なかなか



か安心は出来なかつた。かへつて悪くなるやうな模様で、お咲さんはもう毎日毎日泣き通しに泣いて暮らすやうな事があつた。さうしてしまひには小みつにも逢ふのを嫌がるやうになつた。——さうなると、藤さんがいくら心配しても、藤さんの手には終へなくなつてしまつた。

丁度そのころ歌舞伎座のこんだの秋の芝居にはお咲さんの生んだ子の初舞臺をするといふ評判が新聞に出初めてゐた。

すると二三日、お咲さんは久しぶりで晴々した顔を見せた。——藤さん初めお咲さんの周囲の人達は、みんなほつと安心した。

その三日目の朝、お咲さんは久しぶりで髪を結つた。さうして

その夕方久しぶりで小みつの家へ遊びに行つた。小みつと一緒につれて、二人でお對の半襟を買ひに行くと言つたが、丁度小みつはお座敷で居なかつた。お咲さんはその用だけ云ひ置いて小みつの家を出た。

さうしてその晩——暗い晩にお咲さんは房州通ひの汽船の上から身を投げてしまつた。——

翌朝、小みつの所へとどいた途中から出した端書の外、別にかきおきといふやうなものは何にもなかつた。その端書には、自分の亡い後では藤さんと一緒になつて呉れといふやうな事が書いてあつた。——



夏つは

藤さんと小みつとは、この端書に對して——お咲さんに對して  
濟まないと云つて、それぎり綺麗にわかれてしまつた。さうして、  
それからちき小みつは、淺草から新橋へうつつてしまつた。

『はつ夏』といふ題で、バラソルをかたむけたその小みつの寫眞  
が、この間或る雑誌の口繪に出てゐた。(四十五年五月)

おえらさんの事



今年の暑さは別だ——何日までこんなに暑いんだらう——な  
んて申しましたつて、もう八月の末になりますと、そりやあねえ、争  
はれないものでひとつきりとは、まるで日のいろが違つてまゐり  
ますからね。焼きつくやうにぢりぢり照りつけてるやうでも、何  
處かもう、力のぬけたやうな、疲れたやうな影がさしてゐて、匂ひが  
薄くなつたやうに見えてまゐります。それで、いまその土藏の腰  
巻に、一杯に明るくあたつてゐたと思ふと、すぐにもう、其處は暗く



蔭つてしまつて何時の間にか外のところへ移つてゐるといふ風に、なんだかその日脚の工合も果敢ないやうに早くなつたやうな気がいたします。空を見ると、空はぎらぎら油ぎつたやうに青々として居りますけれど、暗い蔭になつた軒さきや、暖簾のかけや、またあの柳のかけなんか見ますと、冷めたい身に泌みるやうな風がそよそよして、何かさんざん莫迦を仕ちらしたあげく、すこし眼がさめかかつて来たときのやうに、身の周囲がなんだか不安心で、無暗に味氣ないやうな情ないやうな気がいたして仕様がご座いません。かうして終日見世に坐つて居りますと、めつたに外へ出る事はないんでご座いますが、それでも稀に夕方なんか、一寸用たしに近所まで出ましても、始終通つてゐる電車の音なんか、妙に耳

について、何んとなくものの哀れが知られるつて云ふやうな氣がいたすんで御座います。——しかしまあ、かうして、だんだん色が褪めていくやうに世の中が一日ましに、ひっそり静かになつていくんでご座いますがねえ——

何んかこのごろ面白い話はないかとおつしやるんですか——

さうでござ座いますねえ——これがお暑いさかりででもあると世間が一體に浮きうきしてゐて、誰もみんな夜遅くまで、家を外にして方々押しまはしてなんか居りますから、色んな面白い事件や問題も起つてまゐりますが、併しすこし秋風が立つてまゐりますと、妙に世間が義理固くなつてしまつて、誰も眞面目に家の中に納まつてしまふもんでござ座いますから、種がすつかり拂底になつて



しまつて格別お話しするやうな事がなくなつてしまふんでご座  
 いましてねえ——

拂底になると申せば、桐屋のおえいさん——ごぞんじでござい  
 ませう、通りのあの絲屋の上の方の娘——あの娘も、いよいよ今度  
 きまりがついて、近いうちに片づく事になつたんでございまして  
 ねえ。この邊の事のお話をいたすと、三度に一度はきつと出てく  
 る名前で、随分今まで色んな事のひき合ひに出されましたんです  
 けれど、片付いていつてしまつて、人氣役者が一枚減つてしまはう  
 と云ふんでございます——

尤もね、おえいさんが今度その片付く事についても、その片付く  
 事になつた、その裏には、すこし顛末が——一寸した悲劇が一幕あ

つたのでございます。とにかく桐屋のおえいさんと申せ  
 ば、ここいらでは有名で、評判はなかなか評判ではございましたが、  
 一體内輪な音なしの娘で、つひぞ今まで、妙な悪い噂は立てられた  
 事がないんでございます。しかし、どういふものか縁遠うござい  
 ましてね。去年もう二十を越したんでございます。顔立だつて、一寸眼のところ  
 愚圖いたして居たんでございます。顔立だつて、一寸眼のところ  
 が芙蓉に似てゐる位でございますから、決して悪い方ぢやあない  
 んでございます。しかし、幾ら今まで方々から話があつても、いつ  
 もみんな纏まらないうで、中途で毀はれてしまつたんでございます。  
 一體まあこの邊で、二十一二になるまで、一人で家にゐるつて云  
 ふ事は、極く稀なんで、七八といふ聲をききますと、みんなもう片付



くとか、養子をするとかして、ばたばた極まりがついてしまふんで  
 ご座います。ですからもう、おえいさんと同じころの年齢の人た  
 ちは——一緒に學校を卒業したり、一緒にお稽古やお針へ通つて  
 ゐた連中は、みんなもう今は圓鬢に結つて、中には小さいのを二人  
 位かかへてゐる様なのも居ります。是はおえいさんよりたしか  
 二つか三つ下だと思ひましたが、以前すぐおえいさん處の裏にゐ  
 て、毎ばんおえいさんに「黒髪」や「もみぢ葉」をさらつて貰つ  
 てゐた、兜町の客引の娘なんかは、二三年前家の都合で、吉原からお  
 酌に出たところ、この春もう一本になつて、一本になるとぢき、いい  
 お客がついて引かされ、今ちやあ何處か芝居町の方に圍はれてゐ  
 るなんて云ふのもあるんで、ご座いましてね。——周圍がまあ、み

んなさう云ふ風にだんだんに變つてしまつた中に、おえいさんは  
 たつた一人取り残されてしまつたやうな譯なんで、ご座いますか  
 ら、家の人たちは勿論の事、近所でもみんな氣の毒がりましたね。  
 自分の家の娘でも、あるやうな氣になつて、いろいろ心配する向  
 きもあつたんで、ご座いますが、こればかりはやつぱり縁もので、ご  
 座いますから、側でいくら騒いでも、何うだから何うつて云ふやう  
 な譯にはまゐりません。そのうち一年たち、二年たち、三年たちし  
 て、とうとうまあ今年になつてしまつたんで、ご座いますが——  
 しかし、音なしの、内輪だのつて申しましたつて、とにかくおえ  
 いさんも、この邊で生れて、この邊で育つたんで、ご座いますから、深  
 窓の中うちにゐて、世間の事ことなんか何んにも知らないつて云ふやうな



そんなんぢやあご座いません。何もかも知つてゐて何もかも飲  
みこんでゐて、それこそ可笑しければ聲を出して笑ひもいたしま  
すし、口をきかれれば誰にでも挨拶をする位な苦勞はしてゐるん  
でご座いますから、一體に何處かばつとした、派手な賑かなところ  
はあつたんでご座います。しかしさう云ふ風に、周圍がだんだん  
變つていつてしまつて、たつた一人取り残されたやうになつて見  
ると、まあ色んな事が考へて、行くするの事なんかも案じられるん  
でご座いませうね、年々元氣がなくなつて、今までの内輪なところ  
は、いよいよ内輪になつてしまつたんでご座います。すつかりも  
う諦めてしまつたやうに、見世の奉公人の着物を始末をしたり、兄  
さんの子の面倒を見たりして、日々家の手つだひをして働いて、ふ

つつり外にも出なくなりまして。小さい時分から、何より芝居が  
好きで、毎月一度や二度はかかさず行つたんでご座います。それ  
さへこの頃ぢやあ、誘はれば、義理だから據るなく行くつて云ふ  
やうな風になつてしまつたんでご座います。

話が一寸變りますが、やつぱり表通りに出まして、此方からまゐ  
りますと右側に、紀の國屋と申す、見世は小さうご座いますけれど、  
綺麗な小間物屋が——襟地だの紙入なんかも賣つてる小間物屋  
がご座います。何んか紀の國屋の一家と關係があるんださうで  
ご座います。この近所ぢやあ古顔の方で、それに故の主人が世話  
好きでしたもんで、以前は夏のお祭の事から、冬の火の番の  
事まで、町内の面倒な相談は、なんでもみんなこの家に持ちこん



だもんでご座います。しかしそのもとの主人は四年前に亡くな  
りまして、今ではそのお内儀さんが正ちやんと云ふ一人息子と二  
人で、小僧を一人つかつて、見世をやつてゐるんでご座います。  
正ちやんはたしか今年二十六か七だと思ひますが一寸金齒な  
んか入れた色の白い瘦形な——小さんがやる小言幸兵衛の話の、  
仕立屋の息子と云つたやうな工合の好男子でご座いましたねえ。  
まだ一人でゐるんでご座いますが、割に固くつて、別に道樂をする  
つて云ふやうな事もないんでご座います。商賣が商賣でご座い  
ますから、野暮な羅紗の前掛をかけて終日見世に坐つて居るんで  
ご座いますが、道樂と申したら、見世の飾り付けを色色に工夫して  
見る位なもんなんでご座います。しかしさうやつて飾り窓の中

へリポンを引つぱりまはしたり、簪の花を一つ所へ纏めて見たり  
して、始終そんな事に憂き身をやつして苦勞してゐるんでご座い  
ますから、いつも見世が綺麗になつて、人目をひくやうになつてゐ  
るんでご座います。

その紀の國屋の家と、桐屋の家とは、通りを一つ中にして、まあ向  
ひ合つてるやうなもんで、それに桐屋と云へば、やつぱり古顔の方  
でご座いますから、そんなやうな關係で、この二軒は以前からお互  
に心安くしてゐたんでご座います。殊にこの二三年は、桐屋の今  
の主人と——おえいさんの兄さんになる人と、正ちやんと丁度學  
校友だちで、何年間といふもの、毎朝誘つたり誘はれたりしたつて  
云ふやうな縁から、關係がだんだん深くなつて、今ちやあ親類のや



うな交際をするやうになつたんでご座います。

さうでございますから、おえいさんも、正ちやんのおつ母さんの事を、小母さん、小母さんつて云つて、三日にあげず紀の國屋へ出入りしてゐたんでご座います。この正ちやんのおつ母さんと云ふ人は、また妙に六かしい——まあ感情家なんでご座いましてねえ。機嫌がいいときにはさうでもご座いせんが、少し機嫌が悪いと出すと、何處までも意地で機嫌を悪くしてゐようつて云ふやうな人なんで——一寸まあ始末の悪い人なんでご座います。しかしおえいさんとは、何處か氣が合ふところがあると見えて、その後おえいさんがあんまり外へは出なくなり、近所へ顔も見せなくなつてからも、ここの家へだけは相變らず出入りして居りましたんで

——で、夜なんかよく、灯火のあかるい見世さきで、おつ母さんと、正ちやんと、おえいさんと三人、見世番しながら水入らずつて云ふ、恰好で話しこんでゐる様子を見かけるんでご座いました。——時にはまた、正ちやんと二人で一緒にお詣りになんかも行くやうで、したけれど、六かし屋のおつ母さんは、別になんとも云はないで、黙つて見てゐたやうなんでご座います。

そのうち、だんだん色々な事が世間の眼について来て、結局おえいさんは、正ちやんと一緒になるんちやあないかといふやうな噂が、ちらちら聞こえてまゐりました。中にはもう家と家との間に約束が出来てゐるんだといふやうな噂もありました。若しさうでもないんなら、あんなに繁々行き通ひが出来るもんちやあない



と云ふ説なんでも座いますが、しかし一方にはまた約束どころか、そんな話はあるつきりありやあしない。おえいさんの方ちやあそんな氣があるかも知れないが、いざとなつたら、恐らくおつ母さんが承知しないだらうつて云ふやうな事を云ふ説がご座いました。しかしどうも私なんかの見ましたところでは、やつぱり後の説の方が本當らしくつて、今になんか初まるだらう——初まりやあしないかと思つてゐたんでご座います。しかし當人のおえいさんは、そんな噂が色々立つても、別に何んとも思はないで、やつぱり相變らず紀の國屋へ出入りをして居りました。——さう思つて見るからでも御座いませうが、そのうちだんくまたおえいさんは紀の國屋へ出入りするお蔭で元氣が出て來たやうなんで御座

います。

とにかく正ちやんの好い男つて云ふ事は、近所のもう定評になつてるんでご座いますから、今までに随分其處此處の若い女に思ひつかれて、蔭でいろいろ大騒ぎをされたんでご座います。恐らくここいらの居廻りの娘たちは、誰れでも一度づつはきつと、正ちやんの姿を胸の中に描いたかも知れません。——しかし幾ら正ちやんは思ひつかれても、女の方はその思ひついてゐるうちに、ちき十七八になつてしまつて先刻申したやうに、ずんずん他所へ——てんでんに思ひついたまんまで、果敢なく他所へ片づいていつてしまふんでご座いました。

しかし好くしたもので、一人片づいてゐなくなつてしまつたと



思ふとすぐにまた後から代りが出て来るんでございましたね。  
 正ちやんの側には、始終誰れかしか女があるんでございました。  
 現にこの春頃までは、新地の待合の娘がたいへんに正ちやんに焦  
 れましてね。正ちやんの顔を見るために、毎日のやうに願にかけ  
 て、買物に來ると云ふ評判があつたんでございます。しかしその  
 娘はそのうち何んとも要領を得ないうちに、何時の間にか養子を  
 とつて納まつてしまひました。それが納まつてしまつて、ゐなく  
 なつたと思ふと、今度はおえいさんが繁々出入りするやうになつ  
 たんでございますが、しかしさうやつて、おえいさんが正ちやんの  
 側にあるうちにも、もう一人外におえいさんの向うへまはるもの  
 が出て來たんでございます。おたかさんと云ふ、横町の米屋の娘

で、何時とはなしにだんだん正ちやんの側に寄つて來て、やつぱり  
 紀の國屋の家へ繁々出入りするやうになつたんでございます。  
 このおたかさんの家は、この邊に古くからゐるんぢやあないん  
 で、つひ二三年前、外の土地から移つて來て、見世を初めたんでござ  
 います。何處か關西の方の出だといふ事でもございますが、おたか  
 さんを初め、家の者の言葉に酷い訛があつて、氣のせゐかも知れま  
 せんが、此邊の土地の水には一寸合ひ兼ねるやうな氣風の家なん  
 でございます。越してきた當時から、近所の評判はあんまり宜し  
 くなくつて、深くつき合ふ家もなかつたんでございますが、しかし  
 遠慮つ氣のない連中の寄りあひで、自分の方から方々の家へ交渉  
 をつけて近づきになつたんで、ございます。おたかさんなんか



二三度紀の國屋へ買物に行つて、其儘だんだん這入りこむやうになつたらしいんでございます。「おや米屋の娘が紀の國屋へ這入りこむよ」と近所で氣がついた時にはもう平氣な顔をして、見世先で正ちゃんを相手に話しこんでゐたんでございます。

ですからもう紀の國屋の見世には、おえいさんか、おたかさんか、どつちかが見えない事はないやうになつたんでございます。

そのうちに春が暮れて世間は夏になりました。ご承知の通り、此處いらは夏が世界でございまして、夏になりますと、燈籠がある、草市がある、兩國の花火がある——それに殆んど毎ばんのやうに、宗五郎様だの、不動様だの、毘沙門様だの、つて云ふやうに、近所に縁日がたくさんございます。ですからも晝間よりも、反つて燈火のつ

いた夜の方が賑やかになるんでございます。

夜になると、紀の國屋の方の側には、ずつとあの柳の下に、夜見世が出るんでございます。ですからお天氣さへ好ければ、十一時すぎ——十二時位までは、涼みがてらの人通りがぞろぞろございます。紀の國屋でも、瓦斯や電燈を明るくつけて、おつ母さんも奥から出て来て、正ちゃんと一緒に涼みがてら見世番をして居ります。すると其處に、おえいさんが、兄さんの子を抱いて、その守りをしながらやつてまゐります。つづいて、おたかさんが、派手な中形の浴衣かなんかに、せいぜい眞白に白粉をつけて元結とか、梳油とか云ふ買物にかこつけて、這入りこんで来るんでございます。さうしててんでんに、前を通る若い夫婦の悪口を云つたり、買物に来る娘



の品定めをしたりして、十時すぎるまで、埒もなく喋舌つてゐるんでご座います。

菟會壯士と茅淳壯士を、女でいくおえいさんとおたかさんは、初めのうちは會つても挨拶もしなかつたんでご座いますが、さうやつて毎ばんのやうに會つてるうちに、おたかさんの方からだんだん心安くして来て、一緒になつて話をするやうな風に、懇意になつて来たんでご座います。でまあ、肚の中ぢやあ、お互に嫉妬をいであつたのかも知れませんが、表では何處までも綺麗につき合つて、三度に一度は、一緒にお詣りに行くやうにもなつたんでご座います。おえいさんの方から云つたら、とにかく同じ年頃の古い友だちはみんな極まりがついてしまつて、話相手と云つたら一人もゐ

なくなつてしまつたんですから、淋しいんでまあ、つき合ふともなく、つき合つてしまつたんで御座いませう。

するとおたかさんの方からは、一日一日にいよいよ心安くして来て、そのうちにやがて、おえいさんの行つてるお茶へ、自分も行きたいと云ひ出して、おえいさんに無理に頼んで、代地まで一緒に通ふやうになつたんでご座います。併し、さういふ風に心安くなればなるほど、おたかさんはどうも自分とは肌合がまるつきり違ふのがおえいさんに解つて来ました。第一なかなかの見得坊で、大きな事ばかり云ふんでご座います。何かつて云ふと、郷里の話は初めて郷里の家には藏が幾戸前あつて、何ういふ暮しをしてゐる——といふやうな事を、聞きもしないのに饒舌つて、その方からた



びたびお前を貰ひたいといふ家があるから、歸つて来ないかと云つて来るけれど、自分は少々お金がなくつても、東京で東京の人の所へ嫁きたいと思つてるなんて云ふ事を云ふんでご座います。それでその話と云つたら、ちつとも辻褄があつて、居らないんで――それもいいとして、結局はきつと何とかかんと云つて、正ちやんの所へ行く算段ばかりして居るんです。おえいさんはだんだんおたかさんに嫌氣がさして来て、しまひには成りたけおたかさんに會はないやうな工夫をするやうになりました。しまひには面倒になつたんで、おたかさんの居るときには、あんまり紀の國屋へも寄りつかなくなつてしまつたんでご座います。

おえいさんの足がすこし遠のいたと見ると、おたかさんはここを詮度といふやうな調子で、反對にいいよ盛んに足を近く這入りこむやうになりました。かねておえいさんが、正ちやんのおつ母さんの氣に入つてるのを見てゐるんで、自分も一つばし取り入るつもりだつたんでご座いませう。進物を持つちやあ、何んとか口實をつけて、裏口の方から紀の國屋へ這入りこむやうな事も初めたんでご座います。知つてか知らないでか解りませんが、おつ母さんは感情家なだけに、さういふ風に仕向けられると、一時一寸機嫌がよくなつて、おえいさんと同じやうにうち解けて愛想よくしたんでご座います。

すると其處へ、圖らすも、大騒ぎが出来たんでご座います。それはあの朔日と十五日と月に二度出る、道樂世界つて云ふ薄つべら



な雑誌がご座いませう。その浮世しんぶんといふ投書欄みたやうなものところへ、「……町の紀の國屋の息子は、今まで色んな噂があつたけれども、今度いよいよ同町内の米屋のおたかさんと一緒にいふ噂がある。もしもそれが本當だとしたら、がつかりする人が其處らにゐるだらう」といふ投書が出たんでご座います。

何處か近所の事が出でると、その雑誌を賣る奴が、その近所へ行つて、大きな聲で「ええ出ました出ました道樂世界——ご當所ご評判おなじみ寅文社發行の道樂世界——浮世の塵社會のあらさがし、素つ葉ぬき専門滑稽ご評判の道樂世界——」と、盛んに怒鳴り立てて、賣つて歩くんでご座います。紀の國屋の前や米屋の

家の前を、あんまり幾度も行つたり來たりして怒鳴つて居りますんで、何んかこの近所の何處かの事が出でゐるに違ひないつて云ふんで、買つて見ると、その「……町の紀の國屋の息子は……」と云ふ投書が出でゐるんでご座いませう。ぱつと評判になつてしまつたんでございます。つひぞこんな噂はきかないけれど、本當だらうか——おえいさんの事を間違つて出したんぢやあないか——つて云ふやうな事から、一體こんな事を誰れが出したんだらうつて云ふ事になつたんでご座います。

これを聞くと、正ちやんのおつ母さんはすつかり怒つてしまつたんでご座います。誰れの仕業か知らないが、こんなあとかたもない事を云ひ觸らされちやあ家の暖簾に傷がつくつて云ふ位に



怒つてしまつたんでご座います。ご承知の通り、この邊の人たちは、新聞なんかに名前を出される事を、この上ない不名誉な事と思つてゐるんでご座いますから、——殊に全くいい加減な事を明らさまに言ひ觸らされたんでご座いますから堪まりません。こんな事を言はれるのも、つまりはおたかさんなんかが餘り近しく、用もないのに遊びに来るからだと言ふことになつて、その道樂世界が出るのとちき、世間がうるさいから、向後はあんまり来て呉れるな、お互の爲めにも善くないからと云つて、斷然おたかさんに遊びに来るのを斷つてしまつたんでご座います。

すると不思議な事には、おたかさんは紀の國屋からかう云つて斷られるとちき、半月とたたないうちに、不意に芝の方の、やつぱり

同商賣の米屋へ片付いていつてしまつたんでご座います。前からあつた話か、それとも急にきまつた話か知りませんが、あれど、あんまり不意だつたんで、近所の人はみんな、私初め呆氣にとられて、驚いてしまつたんでご座います。

しかし、するとまた、おたかさんが芝へ行つてしまふと、ちき——その後で、あの道樂世界の投書は、おたかさんが自分でやつたんだといふ風評が何處からともなく立つて來たんでご座います。何から考へてそんな事を云ひ出したのか知りませんが、なるほどさう云はれて見ると、なるほどおたかさんがやつた仕業と思はれるやうなところがご座います。

とにかくおたかさんもご多分に洩れず、正ちやんに焦れて、まわ



何んとか云はれて見たかつたんだけど、さきにもうおえいさんといふ人がゐるんで、どうとも思ふやうにならないもんだから、口惜しいのが半分、自ら慰めるために、あんな投書をしたんだらうと云ふんでご座いますがね。でまあ、なんな噂でも立つたら、世間で側から何んとか騒いで呉れて、それがために何んな事にならなことも限らないと思つてやつた仕事だらうと云ふやうな事になつてしまつたんでご座いますが——しかしそれにしても、あんなに急に片づいてしまつたのは可笑しいと云ふんで、未だに色んな噂とりどりなんでご座います。しかしまた考へて見りやあ自分芝へ片づく話がきまつたけれど、それにしてもおえいさんと正ちやんとを、そのまま跡へ残して置くのが惜しくつて、それで行き

がけの駄賃にせつかく澄んで水溜りの上へ石を抛りこむやうな悪戯をしていつたやうにも思はれます。しかしこの騒ぎがあつて以來、おえいさんは紀の國屋へもぼつたり行かなくなつてしまつたんでご座います。従つて、一時あつた正ちやんとの噂も、あれつきりで何時の間になくなつてしまつたんでご座います。——そこへ今度の片づく話が出て来て極まつてしまつたんでご座います。

31

しかし、おえいさんが今度片づく事になつたさきと云ふのは、日本橋邊の、なんでも有名な菓子屋なんださうでご座いますがね。とにかくたいへんに好い家で、あんな家に行かれるなら、今まで辛抱した仕甲斐があるといふ評判でご座います。しかし何んでご



座ざいませう、今いままで割合わりあひに苦く勞らうした人ひとで座ざいますから、これから  
 はだんだん仕合しあははせになるのかも知しれませぬ。――  
 正ただちやんの事ことで座ざいますか――いいえまだその後ご、細君ほこの來き  
 るやうな噂うわさは、何なにんにもききませんが――まだ當分たうぶんは貫ぬきはな  
 いで、あややつて一人ひとりでやつて行くんで座ざいませう。何なにしろお  
 つ母かさんが六むかしやで座ざいますからね。しかしこの頃ころは、自じ分ぶん  
 の家うちのすぐ裏うらに、歌澤うたざわの師匠ししやうが出來でたんで、毎まいばん正ただちやんは其處そこ  
 へ稽古けいこに行いつてゐるつて云いふやうな事ことを誰だれかに聞ききました。多た分ぶん  
 本當ほんたうで座ざいませう。しかし、何なにんで座ざいますねえ、正ただちやんと  
 いふ人ひともまたおえいさんにも、おたかさんにも捨すてられてしまつ  
 て、「浮名うきなたてじと口くちさきで、わざとけなして、あるときは……」

なんてうたひながら、相變あひかはらず一人ひとりで飾かざりだなのかざりつけに苦く  
 勞らうするんで座ざいませうが――云いつて見みれば、氣きの毒どくな、運うんのわる  
 い人ひとで座ざいますねえ。(二年十一月)



雪

(戲曲)



登場人物

陳	良	お	お	お	清
		み	つ	よ	次
	吉	へ	る	し	郎
支那料理人	相場師	清次郎の母	清次郎の娘	清次郎の妻	羅吳服商



髪 結  
煙草屋の主人

暮しづかに明く。

舞臺は銀座の裏通りの、とある煙草屋の二階——清次郎が借りてゐる部屋の模様。

一間の窓。一間の戸棚。

三方壁——階子口へ出られる襖口のみがただ一つついてゐる。

壁に寄せて簞笥や茶簞笥が置いてある。簞笥の上には手文庫や、人形や時計や——細々したものが載せてある。

襖口に近い壁には、袋に這入つた三味線が一挺三味線かけにかけてある。壁の色は鼠がかつた薄い色。(或は茶がかつた

## 薄い色)

一月下旬の寒い冴えた日の午前十一時頃。窓の障子がなるとなく白々と見える。障子をあけると全く曇つた空が見える。(この窓から、往來が見下ろされるこころ。)

曇つてはゐるけれど、雪を模様してゐるので、部屋の中は何處か明るく、静かに落ちついてゐる。

そのあかるい静かな中で、およしが髪結に髪を結はしてゐる。長火鉢がすこし離れて置いてある。その側には裁板や、針箱や、絛臺なんか置いてある。縫ひかけの女物が春らしい、紅い、花やかな色を見せて散らかつてゐる。

やや長き間。髪結もおよしも無言——そこには、その時、なんの物音もして來ない。正午に近いといふ或る心持が、淋しく漂よつてゐる。



髪結。(四十七八——年より老けて見える。落ちついたものしづかな調子。) 今日  
日は深川は、たいへんな人出でございませう。

およし。(三十三四。いろいろの苦勞にかまけて見得も何にもない、構はない身  
形。——併しひと目みて、誰にでも商賣人上りらしい調子が解る。) 深川。(——  
ふと思ひついたやうに) ほんに今日は二十八日でしたね。——不動  
様でしたね。

髪結。初不動様でございますから。——なんだかをかしなお天氣  
でございますけれど、今日一日だけ持たしたいもんでございま  
すね。

およし。さうですねえ。——だけど、この間つからもう降りたくつ  
て降りたくつて仕様がなくなつてゐるんですから。——降らなき

やようござ座んすが。——ですけどね。人間もかう忙しくなつち  
やお駄目ですね。不動様も何も忘れてしまふんですものね。  
髪結。(ごく軽い笑。) まつたくでございますね。——さうでございます  
けれど、私共なんかのはまた、ちやんと知つて、お詣りにいか  
うかなとも思ふんでございますけれど、お天氣が悪かつたり、寒  
かつたりすると、なんだか臆切になつてしまつて、つひ止してし  
まふんでございます。——つまり無精なんでございますかね。  
(軽い笑。)——だけどこの二三日はまた莫迦にお寒いちやあござ  
いませんかね。

およし。さうですねえ。やつぱり模様してゐるくせに降らない  
からでせうけれど——それにしても、もうこんなつて事はあり



やあしませんやね。

髪結。この頃方々様で、死んだ死んだつて云ふお話をよくきくんでございますけれど、やつぱりこんなに、へんに寒かつたり何かするもんで、病人なんかは、たまらないんでございますね。

およし。死んだつて云へば、この間私がお話した病人もね。とうとういけなくなつてしまつたんですよ。

髪結。まあ、——あの米屋町へお出なさる方のお内儀さんつて方、

およし。ええさうなんです。——昨日の晩になつて、急に模様が變つて、とうとういけなくなつてしまつたんですけれど。——それで今日がお葬ひなんです。

髪結。さうでございますか。そりやあまあお氣の毒でございましてねえ。——まだたしかお若いんでございましたねえ。

およし。ええ、さうなんです。私なんかとそんなに違はない位、

なんですけれど。——もうねえ、散々苦勞をしたひとでねえ。

髪結。だけど苦勞をしても死んぢや、あ詰りませんですね。

およし。詰りませんねえ。——こんな苦勞をする位なら、いつその事死んでしまつた方がいいなんて、思つた時分もありましたけれど、今ぢやあもう、いくら苦勞をしても、死んぢやあ詰らないとね、つくづく思ひますわ。(軽い笑。)

髪結。さうでございますともねえ。(無意味な軽い笑。——ぢやあ旦那は今日はそれでお出掛け——)



およし。ええ、昨夜つから——昨夜がお通夜でござんしてねえ。とにかく良人がまだ米屋町へ行つてる時分、すこし世話になつた義理があるもんですから、昨日知らせが来るとすぐ出て行つて——夕方一遍歸つて来たんですけれど、すぐまたお通夜に出直して出て行つたんです。今朝お葬ひが九時つて云ふんですから、ずうつとそれを送つて歸つて来るんですけれど、——もう十一時になるでせうね。

髪結。ええ、彼れこれもう、さうでございませう。——だけど——ちやあ、昨夜はお一人だつたんでございますか。

およし。ええ、一人だつたんですよ。  
髪結。まあ、それは随分お淋しかつたでせうにね。

およし。いいえ、ね、晝間商ひに出たまんま、出先の都合で歸らない事はよくあるんですから、一人つて事はべつに珍らしかあないんですけれど、——昨夜はどうしたんですか、ふとお鶴がゐたら——と思ひ出したら、さあ淋しくつて淋しくつて、——考へなくつてもいい事まで考へて、一人でいろんな苦勞をしまひましてねえ。

髪結。——さうでございませうともね。

およし。だけどおかげで、瀧の家さんの仕事がたいへんにはかが行きました。(軽い笑)なりたけ何か考へないやうに、考へないやうにと思つて、仕方がないから、氣のまぎれるやうにせつせと手ばかり動かしてゐたんです。そしたら今度はすつかり眼が冴



えてしまつて、なんでも寐たのは二時すぎでした。——  
 髪結。まあ。さうでござ座いますか。——そりやあねえ。お鶴ちや  
 んがゐらつしやると、ゐらつしやらないとぢやあ、たいへんな違  
 ひでござ座いませうからねえ。

ふと話が途切れる——  
 遠い表通りの方を廣目屋の囃子が越後獅子をやりながら通  
 る。

賑やかな鐘や太鼓や三味線の音。——やがて通りすぎて聞こ  
 えなくなつて行く——

この間に髪結はおよしの髪を銀杏返しに結び終る。

およし。(ごく軽い碎けた調子) どうも有難うござ座いました。

散らかつた居廻りを片付けかける。

髪結もともども片付ける。

およしはぢきに、癖直しを捨てに窓の側へ立つて行く。

およし。(障子をあける。外を見る。) 雪空ですねえ。(湯をこぼして歸つて  
 来る。)

髪結。今度降りやあ雪でござ座いますよ。

およし火鉢の前に坐る。髪結も火鉢の近くに來る。

およし。(髪結に煙草を吸ひつける。)

髪結。(煙管をうけとりながら——散らかつてゐる仕立物に眼をうつす。) それ

も瀧の家さんのお仕事なんでござ座いますか。

およし。ええ瀧の家さんの——

髪結。あのお家の、去年名古屋の方からお貫ひになつた子は、いよ  
 いよ三月あたりから出る事になるんださうでござ座いますね。



およし。さうですか。だつてまだ小さいぢやありませんか。——  
まだお鶴と同じ位なもんぢやありませんかしら。

髪結。いいえ。お鶴ちゃんよりは、よつほど大きうございますよ。  
だつて、名古屋でもつて、すつかり學校を濟まして、それからこつ  
ちへ來たんだつて云ふんでございますものね。

およし。おや、さうですか。

髪結。お鶴ちゃんも今年で學校の方がおしまひになるんでござ  
います。

およし。ええ、さうなんですけれど——

髪結。しかしお楽しみでございますね。

およし。だつて何んていつたつてもう他人に一旦やつてしまつ

たもんですからね。——だけど今考へると、せめて學校を濟むま  
で家に置いてやればよかつたと思つて、——あんまり瀧の  
家さんの方で急ぐもんですからつひ——何したんですけれど。

髪結。でもねえ。お鶴ちゃんもよく諦らめてねえ。——どんなに  
か、まだおつ母さんが戀しいんでせうに。——いつでございまし  
たかね。丁度泰明學校のところでお鶴ちゃんにお目にかかつ  
たんで御座いますよ。さうしたら「小母さん家に行つて」つ  
てね、お訊きなさるんですよ。

およし。何しろ家が近所だけにね——考へると可哀想なんで  
すよ。

髪結。さうでございますね。學校やお稽古の行き歸りなんか、側



を通つたりなんかしたら自然會ひたくなつて。——さうでございますね。忘れようとしても鳥渡忘れられない道理でございますねえ。

およし。瀧の家さんの方へも悪るし——またあの子の爲めにもなりませんから、固く云ひつけて、なりたけ寄せつけないやうにしてゐるんですけれど——（言葉濁る心持。）

髮結。（それには深く注意しないで、ふと話の調子をかへる。）でも瀧の家さんのおかみさんは、ああいふ解つた、いい方ですから、ご安心はご安心でございますわね。

およし。ええ——ですけれどね（顔を上げる。）この稼業ぢやあ、自分が散々苦勞をして來てもう懲り懲りしてゐるんですから、何う

か子供だけはね。——堅氣でもつて、その苦勞をさせたくないと思つてゐたんですけれど——だけどやつぱりさういかないで。（遣瀨がないやうな笑。）

その途端に襖があく。二人はふとその方に向く。良吉が這入つてくる。

良吉。（三十一二。色の白い、小才を利かすらしい顔立。——贅澤な、しかし地味な身形。黒紋付の羽織の上へ鐵無地の羽織を重ねて着てゐる。）ああ寒かつた。——（立つたまま、四邊の様子を見廻して）おや、大將はまだ歸つて來ないんですか。

およし。いいえ、まだ、——一緒ぢやなかつたんですか。

良吉。お寺を出て電車までは一緒だつたんですがね。——ぢやあとうとう一臺乗り遅れたんだな。



およし。そんならぢやあぢき歸つて來ますよ。——まあ立つてな  
いで、此方へ來ておあたんなさいな。

良吉。(氣がついたやうに帽子なんかを投げ出して) まあとにかく、あたら  
して貰なくつちや。(火鉢の側へ寄つて來る。)

髮結。(火鉢の側から離れるやうにして) こちらへいらつしやいまし。

良吉。ああ退かなくつともいいんですよ。

髮結。ええ——いいえ、またお喋舌をしてしまひました。午前

もう一軒廻らなけりやならないお家があるんでござ座います。  
(立ちかける。)

およし。相變らず勝手な愚痴ばかりこぼして濟みませんでした  
ね——どうもご苦勞様でした。

髮結。いいえ私こそお邪魔してしまつて——ぢやあご免下さい

まし。(挨拶する。——良吉にも挨拶して出て行く。およし、襖口まで立つて行く。)

良吉。今日はまあ本當にしんに寒い日ですな。

およし。(火鉢の側へ歸つて來る。) 家にも随分こたへますからな。

——雪になるんですよ。これぢやあ昨夜のお通夜は寒かつた  
でせうね。

良吉。ええ、十一時、十二時頃——更け際のその寒かつた事つたら

——たまりませんでしたね。尤も一時うつてから先は、熱くな  
つて汗をかきましたかね。(意味ありげな笑。)

およし。お酒が廻つて。

良吉。酒——まあ酒が廻つたからには違ひないんですがね。(薄



笑。一時うつとお念佛は女連の方へ引渡しちやつて、同勢七人——胸の中で数へて見て、七人ぢやあない、八人だ。連中八人で二階へ上つてしまつたもんです——（笑。）

およし。（驚いたやうに）まあ、お花を初めたんですか。

良吉。ええ、鳥渡そのね——（笑——ふと階子の音に注意する。）おや大將歸つて来たんぢやあないかしら。

立つて行つて襖をあけると、途端に一人の支那人がしづかに部屋の中へ這入つて来る。

良吉。（その姿を見て）なんだ陳さんか。

陳。（五十五六。大柄な恰幅。茶色の服を着てゐる。——全く日本馴れのした調子。）今日は。（良吉に挨拶し、およしに挨拶する。）

およし。おやお出でなさい。（憚ばしからぬ心持。）

良吉は元の座に戻る。陳はその側へ坐る。

良吉。（陳に）大將まだ歸つて来ないんでね。

陳。さうですか。

およし。（ふと口を挟む。）何か相談でも出来てるんですか。

良吉。なあにね。どうせ半日潰れちやつたんだから、今日はもう遊んでしまふつもりでね。——今ここへ来がけに鳥渡陳さんな引張り出して来たんですよ。

およし。ああさう。（何氣なく云つて、ふと心が曇る。——散らかつたままになつてゐる仕立物を片付け初める。）

陳。（それを見て）綺麗ですな。



およし。ええ——（構はず片付ける。）

良吉。（前にしかけた話の續きはなし出す心持。）それからまあ、二階へ上つたんですがね——

およし。——だけど随分亂暴ぢやありませんかね。お通夜の晩だつて云ふのに——佛様が可哀想ぢやありませんかね。

良吉。ところが、——兎に角、だつて主人公が先棒を振るんだから始末が悪りいんでさあ。こつちの大將なんかは流石に少し氣がさしたやうだつたけれど、何んて云つても多勢に無勢でね。中には葬ひを花會のやうに心得てる連中があるんでせう。そんな連中に云はしたらこんな事は當前な事なんだから——纏まうが早いんでさあ。——ところがね。面白いのは主人公なん

で、——何しろ細君に死なれる位だから曲つてゐるさあ。やりやあ、やるほど悪いもんだから、さあ躍起になつちやつて、「おこと！ たのむぜ。明日は上焼にしてやるから、ええ。しつかり頼むぜ——」つてね。（二々力を入れて花札をめくる眞似をして見せる——笑。）

およし。（痛ましい氣がするやうに）まあ——

良吉。考へりやあ細君こそ災難さね。散々苦勞をさせられた擧句、死ねば死んだで——死んでまでおつけかけに苦勞をさせられるんだから。——（笑）

およし。私だつたら行くところへ行けやしません。——勝負事つて云ふと誰でもみんなさうなつちやうんだから——私ほん

とに勝負事はいやですよ。（ふとまた心が曇る。）



陳。(良吉に)甘い事ありましたらう。

良吉。ところが。——この大將も手前も滅茶滅茶。てんで起きないんだから酷いや。それでもこの大將なんかは初めに二度三度吟味をとつたからいいけれど、手前と來たら曲つたつきつて云ふんだから——もうみぢめなもんです。

陳。ほう。(およしはなりたけ話をきかないやうにしてゐる。)

良吉。だから今日もう一度、まん直しをやらうつて云ふ譯なんさ。

襖があく。清次郎が力のない沮喪したやうな何か考へられてならないやうな様子で這入つて來る。

良吉。どうしたんだい。莫迦に遅かつたぢやないか。

清次郎。(三十五六。色の蒼白い、瘦せた寡黙らしい顔立。——外套。銘仙の着物

に銘仙の羽織を着た身形。)ああ、鳥渡寄道して來たもんだから。(陳に軽く挨拶しながら外套をぬぐ。)

およしは立つて行つて、その外套を壁にかける。それから下駄を始末しに行く。ところで階下へ下りて行く。

清次郎はおよしの立つたあとへ行つて坐る。

良吉。多分電車で遅れたんだらうと思つてた。——俺はあれからすぐ此方へ來て、陳さん所へ聲をかけたに寄つたら、遊んでたから序でに鳥渡引張り出して來た。——ねえ陳さん。

陳。今日は閑暇です。ぶらぶらしてゐます。

清次郎。ああさう。

良吉。で、どうするい。何處か當てもあるのかい。

清次郎。(氣のすすまない風で)當てつて別にありやあしない。



良吉。ぢやあ、やつぱり陳さん處へ行かうか。——陳さん。君の方の都合はいいかい。

陳。どうせこんなお天氣でお客はありませぬ。みんな遊んでます。都合悪くはありませぬ。家でやりませう。

良吉。さうか。陳さんの都合さへよければ、こつちは何處でもいんだから。ぢやあ陳さん處へ行く事としようぢやないか。

清次郎。さうだね。  
陳。丁度いい事があります。昨日——一昨日から横濱から友達が二人遊びに来てゐます。二人とも勝負がすきです。金持です——(笑。)

良吉。横濱から——へええ。そいつは面白いや。——(清次郎に)ね

え、面白さうぢやあないか。

清次郎。うむ——(氣のない返事。)

良吉。(清次郎の滅入つた様子に注意する。)どうしたんだい。莫迦に氣のない顔をしてゐるぢやあないか。

清次郎。(紛らすやうに)べつに何うもしやあしない——何しろ昨夜寐ないから。

良吉。俺だつて寐やあしない——いや、寐た寐た、俺は寐た。曉方か一時間ばかり寐たつけ。すつかり取られちやつて癢だから、座敷の隅へころがつてたら、そのまんまい心持にうとうとしてしまつた。——さうか、ちつとも寐なくつちや、堪らないだらうな。



清次郎。それに嫌にぞくぞく寒くつていけない。

良吉。(併しもうそれには構はない風で)ぢやあすぐ出かけようぢやあ  
ないか。(立ちかかる。陳も一緒に立ちかかる。)

清次郎。さうか。ぢやあ一足さきへ行つて呉れないか。あとか  
らすぐ行くから。

良吉。どうしたんだい。莫迦にぼんやりしちやつて。——あとか  
らなんて行はないで、一緒に來たらいいぢやないか。

清次郎。寒くつていけないから、湯へ一杯這入つて來たいと思つ  
て。——すぐあとから行くよ。さきへ行つて呉れ。

良吉。さうか。ぢやあ先へ行かう。なりたけ早く來て呉れなく  
つちやあ困るぜ。

清次郎。うむ、すぐ行く。——

陳。待つてます。

良吉と陳が出ようとするところへ、およしが階下から上つて  
來る。

およし。おや、お歸り。

良吉。ええ、お邪魔しました。——これから陳さん處へ行くんです。

およし。ああさうですか。(ふと清次郎の方を見る。清次郎は黙つて坐つ  
てゐる。)どうもいつもお構ひ申しません。

良吉。どういたしまして。——(清次郎に)ぢやあ清さんいいかい。

清次郎は煩さうにうなづく。良吉と陳と出て行く。

およし。お前さん、着物着かへるでせう。

清次郎。ああ、俺は湯に一杯這入つて來る。(帯を解き初める。)



およし。お湯へ。さう。(行火へかけてあつた不斷着を持って来て着かへさせる。さうして清次郎が着かへてゐるうちに手拭や石鹼を仕度して火鉢の上へ置く。)

およし。すぐ歸つて来るんでせう。ご飯の仕度をして置きますから。

清次郎。すぐ歸つてくる。

およし。(たしかめるやうに)陳さん處へ行くんぢやあないんでせうね。

清次郎。(逃はれるやうな心持。——間。——)どの途一度歸つてくるよ。(出て行く。)

およし脱ぎ捨てられてある着物を疊む。疊みかけてふと何か氣のついたやうに時計を見る。それから立つて窓をあけ

て空模様を見る。——やつぱり曇つてゐる。鈴屋の笛が遠くを通つて行く。

またもとのところへ返つて着物を疊みかゝる。やゝ長き間。——急に階下の煙草屋の主人が這入つてくる。

主人。(四十七八。小柄で髪の毛が薄い。——襟のかった半纏を着た身形。)おかみさん、おかみさん。あの——おつ母さんがお出でになりましたよ。

およし。(着物を疊みかけたまま)ええ。おつ母さん——

主人。あの神田のおつ母さんですよ。

およし。ああさう。——(ふと喜ばしさが顔に上る。)濟みませんがどうぞ二階へ——

主人。今もう上つていらつしやいますよ。



おみへ、初不動の歸りのこころで蓼葉細工の住吉躰を手に持つて這入つて来る。

おみへ。(五十八九。色の白い瘦形。圓鬘に結つてゐる。——お召の着物にお召の羽織、白足袋といふ身形。何處か意氣なところが窺はれる。——肩掛をとりながら調子よく)無斷でづかづか上つて來ましたよ。——

およし。まあおつ母さん。よくまあねえ——お寒うご座んしたらう。さあずつと火鉢の側へ行つて下さいましたよ。

おみへ。ああ有難う。——(そこに居た主人を見て挨拶する。)おや——その後はどうも暫らくご無沙汰いたしました。別にお變りもなかつて。——

主人。(口ごもりながら)あなたもお變りなかつて。——

おみへ。有難うご座います。お蔭様で風邪もひきませんで。——また相變らずいつも二人がご厄介にばかりになりました。

主人。どういたしまして。——手前こそ——春になつてまだおつ母さんが——まだお見えにならないけれど——如何なすつたんだらうつて——昨日もおかみさんと話してゐたんでご座います。

おみへ。ああさうでございますか。いえねえ。家内が多いもんでございますから、やつぱり春はごたごたいたして居りまして——來よう來ようと思つて居りましたも、つひ出る折がご座いませんで。今日は深川の不動様へまゐりましたから、それから歸りにこつちへ廻つてまゐりました。



主人。さうでございましたか。——(間)ちやあどうぞごゆつくり。  
おみへ。有難うございます。

主人。(およしに) おかみさん、火はありますか。

およし。ええ有難う。たくさん起つてゐますから。(主人出て行く)  
おつ母さん、こつちへどうぞ。

おみへ。ああ有難う。(火鉢の側へ坐る。)

およし。(火を掻き起しながら) よくいらしつて下さいましたね。春  
になつて一度もいらつしやらないから、本當にどうなすつたか  
と思つてました。——ああ春初めてでございましたね。お芽  
出度うございます。

おみへ。ああさうだつたね。お芽出度う。——相變りませず。(笑。)

誰も別に變りはないかい。

およし。ええ、有難うございます。お蔭様で身體だけはみんな丈  
夫でございます。

おみへ。ああさうかい。それは丈夫なのが何よりだよ。(煙草入を  
出しかける。) 本當にね。春は早速来ようと思つただけれど、今  
も云つた通り春は人の出這入りも多かつたり何かするもんだ  
から、鳥渡出られなくなつてね。二三日前にやうやく車で四五  
軒年始廻りをしたやうな譯なんだよ。——その時築地まで来た  
からよつぽと寄らうかと思つただけれど、生憎いつもの車夫  
でなくつて、知らない男だつたから、また面倒だと思つて、ずうつ  
と歸つてしまつたがね。——(およし、この間に茶をついで出す。) ああ



もう構はないで——だけど、何日だったつけかね。この前、私がここへ来たのは。

およし。あれは丁度暮の金毘羅様の日でございましたよ。納めの金毘羅様で、たいへんに人が出たつて——

おみへ。ああさうだったね。ちやあざつと二月来なかつたんだね。

およし。(話の調子をすこしかへる。)暮と云へば、——暮にはまた、ご無理を願ひまして、——いつもながらご無理を願ひまして申譯がございませぬ。(なにもものか粉らはす寂しい微笑。)

おみへ。(靜かに煙管をはたきながら)ああ、あれかい。あれはね。實はもう少しどうにかして上げたかつたんだけれど、あんなにもう

押しつまつて、急な事だつたもんだから、さういかなくつてね——およし。いいえ。どういたしまして。——お蔭様でほんとに助かりました。——私が迂つかりしてゐたのも悪かつたんですけれど、良人も何とも私に話しといて呉れなかつたもんですから——おみへ。そりやあ清次郎だつて、毎々の事だもの。さうさうお前にだつて云へた義理ぢやあないからね。——まあ今度のは商賣上の損だつて云ふから、仕方がない處もあるけれど——ただ今までに、幾度あんな金貸の腹を肥やしたか解らないんだからね。——併しこの頃はどんな鹽梅なんだい。少しは身にしみて商賣をやつてるやうかい。

およし。(わざと装つた調子で)ええ、この節は自分でも考へたと見え



まして、たいがい毎日、商ひに出て居ます。——尤も今日は折れ口  
がありまして、それへ行つて歸つて来て、今お湯へ鳥渡行きまし  
たけれども——

おみへ。もう、少しは考へて呉れなくつちやあね——ちやあ勝負  
事の方もこの節は。

およし。(繕ふやうに) ええ、——その方も、この節はあんまり——ち  
つとも、いい鹽梅に出掛けないやうですけれど——

おみへ。勝負事だけは是非どうしても止めさせなくつちやね。  
商賣に身を入れる、入れないなんぞは、多寡の知れた事なだけ

れど、勝負事を止めて呉れないと、世間の信用がつかないからね。  
——是はなまじ初めに米屋町へなんか這入つたのが悪かつた

んだけれど、——早い話が、實はそれさへ止めて呉れば、あれの  
姉もね、どうにか兄貴殿に口をきいて、もう一度出入りだけでも  
出来るやうにしてやりたいつて云つてるんだがね。——姉もね。  
實はお前が暮に寄越したあの手紙も見つて知つてるんで、たいへ  
んにお前が氣の毒だつて云つてるんだよ。

およし。(何となく涙ぐまれるやうな心持) 何うもいろいろご心配をか  
けまして濟みません。いえね、私がもう少ししつかりしてゐり  
やあ、いいんでご座んすけれど、——

おみへ。(何がなしに憫れまれるやうな心持) 決してそんな事はありや  
あしないよ。私だつて清次郎には愛想をつかしてゐるんだも  
の。ただ私はお前とお鶴が可愛想でね。どうにかして、私がこ



こへ来るんだだけでも、大びらに家を出られるやうにしたいと思つてね。

襖があく。主人が顔を出す。

主人。(およしに) おかみさん、鳥渡。

およし。はい。(立つて行く。主人が小聲で何か云ふのを聞いて) 今、お湯からまだ帰りませんかからつて、——どうぞ濟みませんが、さう云つて下さいまし。(主人、襖をしめる。およしはもとの座へかへつて来る。)

おみへ。(不意に) その後お鶴の事はどうなつたんだい。もう藝者屋の方へ行つたきりになつてしまつたのかい。

およし。その事も詳しくお話しなけりやあならないんですけれど、——此方の方のつもりぢやあ、せめて學校を濟ましてか

ら、やるつもりでゐたんですけれど、向うちやあ、一日も早く寄越して貰ひたいやうな様子でやいやい云つて來ましたから、思ひきつて、すぐに向うへ渡してしまひました。それですだから、今ぢやあ向うの家から、毎日學校へ通つてゐるんですけれど。——おみへ。さうかい。——(諦めるものやうに) まあ、それも仕方がない

ね。考へりやあ可愛想だけれども、また行く行くの事なんか考へると、今家にあるより、その方が却つてあの子の爲めだかも知れないね。さうなるのも、かうなるのも——みんなさう云ふ事になる廻り合はせなんだらうから。——だけど私はもうここへ來ても、あの子に會へなくなつて、この世の中の樂しみが一つなくなつてしまつたよ——(笑) それでも時々遊びにでも來るか



い。

およし。ええ——やつぱり家は戀しいと見えて、——あんまり他人には云へない事なんですけれど、少しの暇を見ちやあ、毎日のやうに来るんでございます。

おみへ。毎日のやうに。

およし。學校へ行くのに、毎日家からお辨當を持って出るんですけれど、晝飯になると、家まで食べに歸るつもりにしちやあ、お辨當を持って、ここへ来て食べるんですの。わざわざここまで食べに来るんでございますよ。

おみへ。(ふと悲しみをそそられる心持) 毎日ねえ——

およし。来たつて、わづか十分か十五分位しきや居られやしない

んですけれど、それでも、やつぱり来たいと見えて、雨が降つてどんなに道が悪いやうな日でも、何でも、わざわざ来るんでしてね。——尤も表向きは、さうさう来る事も、またさうさう寄せる事も出来ないんですけれど——やつてしまつたものを、向うの家へ悪いとは思ふんですけれど、可哀想だと思つてつひね。——

おみへ。晝飯に来るつて、お前、今日はもう来てしまつたのかい？ およし。(ふと氣がついたやうに。) いいえ。今日はまだ来ないんです

けれど(時計を見る) ああもう十二時半です。来ればもう今頃は来る時分なんですけれど——あの子も来るたびに、お祖母さんはいつ来る、いつ来るつて、會ひたがつてゐるんですから、今日来りやあ、丁度いい機會なんだにね——



おみへ。私は十一月來た時會つたきりだから——もう随分會はないよ。

およし。(ふと階子の音をききつけたやうに) おや。來たんぢやあないかしら。

おみへ。ええ、來たかい。(ふと注意する。)

およし、立ちかける。と、そこへお鶴が這入つて來る。

おつる。(十二三。色の白い眼の淋しい顔立。桃割に結つてゐる——襟のかかつた着物。友禪の羽織。——辨當の包を袖にかくして持つてゐる。今日は——(襖の外で靜かにかう云ひながら襖をあける。何氣なく部屋の中へ這入りかけて、ふとおみへの居るのに氣がつく。餘り思ひがけないのを、驚くやうにふと無言。)

おみへ。まあ、お鶴や——(と、云はれて、おつるは一時に云ひしらぬ悲しさ懷

かしさに迫られて堪へられぬやうな心持。およしの後ろへ來て思はず泣いてしまふ。)

およし。おつるや、おばあさんにご挨拶しないかね。——何んだね。

嫌な子だね。泣かなくつたつて、いいぢやあないか。(寂しい微笑。)

おつる。(泣く——もう泣き止められぬ心持。)

おみへ。(おのづと涙ぐまれて來る。——それをまぎらすやうな寂しい笑。) どうしたの。

およし。今日はいつもより遅かつたんだね。

おつる。(歎歎しながら) ええ——

およし。おばあさんがね、お前が晝飯に來るつて云つたもんだから、來るのを待つてらしたんだよ。



おみへ。久しく顔を見ないからね。顔を見て行かうと思つて——でもよく来たね。

おつる。(歎)——ええ

およし。(思ひ出したやうに) ああ勝手な事ばかり云つててすつかり忘れてゐましたけれど——おつ母さんはまだご飯前なんぢやあないんですか。

おみへ。まだだけれど今日は朝が遅かつたせいかまだ食べたくない。

およし。さうですか。ですけど何なら——

おみへ。いいえほんとに澤山だよ。それよりおつるは時間があるんだらう。そこで食べたらいちやあないか。

およし。今日はいつともより遅いんだから、ごめん蒙つて早く食べておしまひな。

おつる。(間)食べたかないの。(低い聲)

およし。食べたかないつてお前、そんな事云つてお腹がすくよ。

おつる。でも食べたかないの——

おみへ。涙でお腹が一杯になつちやつたのかい。(笑)——ああそ

んなら好いものがあつた。お待ち。(袂から菓子包を出す)今途中で一軒寄つて貰つて来たんだけれど。——是でもおあがり。

およし。(包を取つて)まあ綺麗なお菓子——お前の好きな烏羽玉だよ。

二人ですすめておつるに菓子を食べさせる。おみへ、お茶を



ついでやりなどする。長き間——二人はふと黙つておつるの横顔を見てゐる。

およし。(時計を見て)お前まへもう一時いちじだよ。學校がっこうへ行いかなくつちやあ  
いけないんだらう。

おつる。ええ——(去るに忍びない心持。)

おみへ。學校がっこう遅おそくなると叱しかられるんだらう。

おつる。ええ——(また涙ぐまれてくる心持。)

おみへ。(様子を見て)學校がっこうは遠とほいのかい。

おつる。いいえ。すぐそこ——

およし。數寄屋橋すきやばしのとなんですよ。

おみへ。それちやあ、私あたしがその學校がっこうの側そばまで送おくつてつて上げよう

ちやあないか。

およし。でも、わざわざたいへんです——

おみへ。なあに、どうせ車くるまを連つれてるんだから、ぶらぶら其處そこまで  
行いかうよ。——(おつるに)さうしようね。

おつる。(無言——ふと、およしの顔を見る。——何か安心を得たやうな心持。)

おみへ。ちやあ私あたしはおいとまするよ。(立ちかける。)

およし。でも、もう良人りやうぢも歸かへつて來くる時分じぶんですから——

おみへ。お前まへとお鶴つるに會あへば、清次郎せいじろうなんかには用ようはないから。(輕  
い笑。——紙入を出して、幾枚かの紙幣を火鉢の蔭へ置く。)例れいの通とほり何なんにも  
買かつて來こないから——

およし。いつもそんなご心配しんぱいばかりかけて。



おみへ。まあ、いいよ。——それからこのやあ、とこせを一つ置いて  
行かうね。子供だまし見たやうだけれど——(笑。——立ち上る。ち  
やお鶴や行かうかね。

およし。どうもいつも失禮ばかり——ちやあまたお近いうちに

おみへ。ああ、こんどはちき——來月になつたらちき來ますよ。

おみへ出て行く。おつるも欣ばしさうに出て行く。——およ  
しも二人を送つて一緒に出て行く。

舞臺暫らく空虚。やがておよしがかへつて來る。窓の側へ  
寄つて、細目に障子をあけて、外を見る。——併しちきにそこを  
離れて、おみへが置いて行つた住吉踊を壁の三味線かけにさ  
し、散らかつたそこらを片付ける。

間。清次郎が湯から歸つて來て、靜かに這入つて來る。

およし。まあお前さん、もう一足だつたのにね。——いまおつ母さ  
んが來て歸つたところですよ。

清次郎。(前よりも幾分か心持が引立つてゐる。——濡れた手拭をおよしに渡し

ながら) お袋が來た——さうか。(住吉踊に目をつけて) ああ今日は  
不動様だな——飯の仕度は出來てるのか。

およし。丁度お前さんが出て行くとすぐおつ母さんが來たんで、  
つひまた仕度ができませぬけれど——少し待つて下さいな。

ちきしますから。

清次郎。昨夜酒をのんで今朝はまだ飯を食はないもんだから、莫  
迦に腹が減つた。何でもいいから早くして呉れ。飯を食つた  
ら少し用があるんだから。



およし。(不安さうに)陳さん處へ行くんですか。

清次郎。何だか今日は行きたくないけれど、行かないとまだ愚圖

愚圖いつて、あとがうるさいから——  
およし。(氣をかへて)ぢやあ鳥渡横町まで行つて何か見て來ますか

清次郎。行くんなら傘をもつてかないと、何んだかちらちらやつて來たやうだぜ。

およし。あら、とうとう降つて來ましたか。(窓をあけて見る。いつか、雪がしとしと降り出してゐる。)大した事はないでせう。

清次郎。早く歸つて來て呉れよ。

およし出て行く。清次郎、火鉢の抽斗から剪刀を出して、蒲團

の上で爪をとり初める。

主人が襖をあけて顔を出す。

主人。清さん。角の支那料理から、すぐ來て呉れつて迎ひが來ましたよ。

清次郎。ああさうですか。有難う、——濟みませんが、今ちき行くつて、さう云つて呉れませんか。

主人。さつきも一度來たんですよ。

清次郎。ああさうですか。濟みません。どうぞちき行くつて——  
主人襖をしめて出て行く。

清次郎は爪をとり續ける。

間。——舞臺は幕の明いた時のやうに明るく靜かに落ちつく。

——急に往來の方が騒がしくなる。——近所に何か起つたやうな



様子。——慌ただしく入り亂れた足音が通りすぎる。

清次郎はふと耳を欬てて聞く。喧騒。

およしが慌ただしく襖をあけて這入つて来る。

およし。(轉倒した心持)お前さん、たいへんですよ。

清次郎。どうしたんだい。

およし。今陳さん處へ手が這入つたらしいんですよ。

清次郎。何手が這入つた。

窓の側へ立つて行つて、急いで障子を明ける。——外を見る。

およしも、ひき添ふやうにその後ろへ立つて外を見る。

間。喧騒。

雪はしとしとと、だんだん降りが強くなつて来る。(幕)

(四十五年三月)

浅草

久保田万太郎著

暮れがた。プロロオグ。遊戯。

朝顔。挿話。話。浅草田原町。



大正二年一月十五日印刷  
大正二年一月二十日發行  
定價金壹圓

著者 久保田 万太郎  
發行所 東京市京橋區銀座三丁目八番地  
勸山仁三郎  
東京市下谷區上野櫻木町四十番地  
印刷者 小松 周助  
東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
印刷所 東洋印刷株式會社

發行所 東京市京橋區銀座三丁目八番地  
大阪市東區南久太郎町三丁目  
勸山書店  
振替貯金 東京二四一七番  
大阪一三六八番



272  
415



終

